



西川津遺跡詳細分布調査報告書

昭和 56 年 3 月



教育委員会

西川津遺跡詳細分布調査報告書

昭和 56 年 3 月

島根県教育委員会

例 言

1. 本書は島根県教育委員会が国庫補助を受けて昭和55年度に実施した西川津遺跡の詳細分布調査の報告である。
2. 本調査は下記の方々の指導、協力、援助を得て実施した。記して謝意を表する。
 - ・調査指導者
山本 清（島根県文化財保護審議会委員）
勝部正郊（ 〃 ）
河瀬正利（広島大学文学部助手）
 - ・調査協力者
浦田和彦（島根大学学生）、遠藤浩己（同）、秦誠司（同）、岩井重道（同）
なお、遺物整理、図面整理にあたっては、井上洋子、佐藤順子が参加した。
3. 調査は島根県教育庁文化課埋蔵文化財係長勝部昭、同文化財保護主事石井悠、同主事西尾克己、同(兼)主事村尾秀信があたった。
4. 調査を実施するにあたっては地元西川津町大内谷地区の野津恭、野津実、野津喜郎の各氏に多大の協力を得た。記して感謝する次第である。
5. 本書の編集、執筆は上記調査指導の先生方の助言を得ながら直接調査を担当した村尾秀信があたった。

目 次

1. 調査に至る経緯	1 頁
2. 遺跡の位置と周辺の遺跡	2 頁
3. 発掘調査の概要	4 頁
4. 検出された遺構	7 頁
5. 出土した遺物	9 頁
6. ま と め	12 頁

1. 調査に至る経緯

本遺跡の発見は古く、松江市街地の北東部西川津町を通る県道松江一境線の道路沿（西川津町字海崎地内）に設けられた電柱埋設工事の際に、弥生式土器、石器等の遺物が発見されたことに始まる。その後、今日に至るまで相当の年月を経ているが、遺跡の範囲および実態等については発掘調査が行なわれたこともなく不明であった。ところが、昭和54年3月になって、これまで西川津遺



第1図 遺跡の位置

跡と称されていた上記の地点から南へ約700mほど離れた西川津町宮尾坪内地区の学園橋付近で弥生式土器等が発見された。これは付近を踏査中の学生の手によるものであったが、このことから遺跡の範囲拡大が考えられたので、西川津遺跡として取り扱い、本遺跡の範囲は朝酌川の河川敷を中心に、南北に800m、東西に200mにおよぶものと想定された。

現在、水田として耕作されている本遺跡周辺一帯は朝酌川の中流域にあたる。この付近は流路が蛇行し、しかも比較的低地にあるところから毎年出水期には洪水に悩まされ、水田が冠水したり、付近の道路が通行不能になるということがしばしばであった。このため近年よりこの川の改修工事が計画され下流から施行されている。更には、上記した県道を中心に市街化が進み、それが本遺跡周辺にもおよび、重要な遺跡の確認もなされないままに開発行為が進展するおそれも生じてきた。

そこで、島根県教育委員会は、こうした開発行為に対処するための基礎的資料を得るため、国庫補助を得て、本遺跡の実態および範囲を確認する詳細分布調査を実施することとなった。

調査地については、南北に細長く広がっていると推定されている本遺跡の中央部から以北を選定した。これは、南側の学園橋周辺地区は上記の遺物発見以来、昭和54年8月の分布調査、それにもとづく昭和55年7月～9月の発掘調査が実施されており、その結果から地表下約1.8m～2.9mまでの砂礫層の中に弥生式土器を中心とした各種の土器、石器、木製品などが検出され、ある程度の実態がつかめていること、また、遺跡と推定されているこから一帯は先に述べた朝酌川の改修計画が近い将来予想されているという理由によるものである。

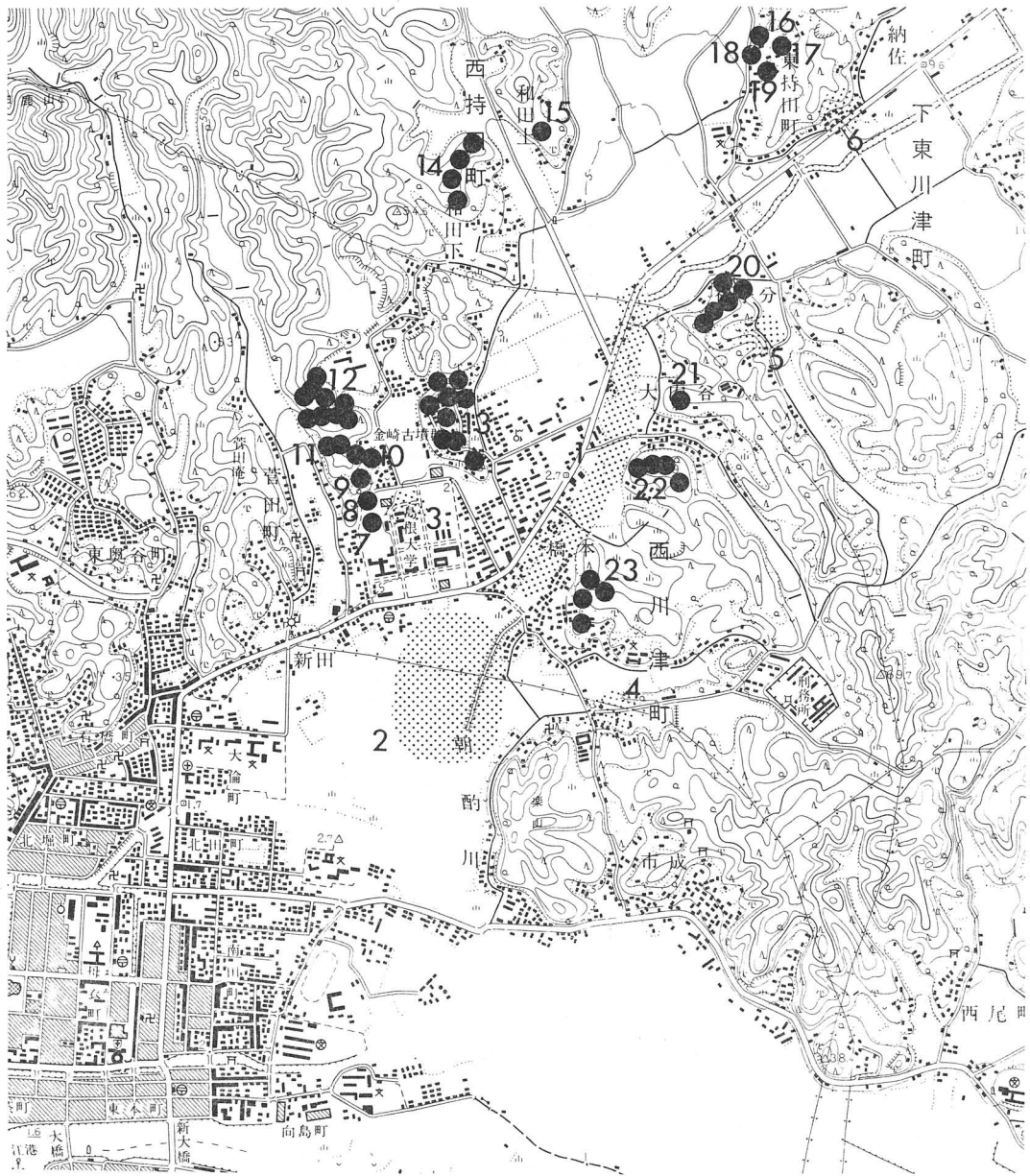
2. 遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡の所在する地籍は、松江市西川津町大字宮尾坪内、荒槇、橋向、井手下、海崎他で通称大内谷地区の西方に広がる朝酌川の中流域一帯の沖積地の低平な水田中にある。このあたりは松江市の市街地の北東部を占める川津地区の北部にあたり、嵩山、和久羅山の両山塊が西へせり出し、やがて朝酌川へと下ってゆく大内谷丘陵に添うかたちで朝酌川が流れているが、本遺跡はその河川敷を中心に東西約200m、南北約800mの広がりを持つものと推定されている。

さて、本遺跡の周辺には数々の遺跡の存在が知られている。縄文時代の遺跡としては金崎遺跡など平野周辺部で点々と知られているが、発掘調査によってその内容、性格が知られているものは今のところない。弥生時代になると、島根大学構内遺跡、貝崎遺跡、橋本遺跡などが知られており、特に本遺跡より南東へ約1.5km下流域一帯に所在するタテチウ遺跡は、昭和52年の発掘調査によって弥生式土器を中心とした各種多量の土器、石器、木製品、特殊遺物などを検出したことによりよく知られているところである。一般に弥生時代の遺跡は平野、淵辺の水田面下に深く埋れているものと思われ、現在判明されているものの数倍にも達するとみられる。

そして次の古墳時代になると、比較的古式の様相を持つ下東川津町の道仙古墳群、中期後半の金崎古墳群、菅田ヶ丘古墳、薬師山古墳などがある。このうち発掘調査のなされた金崎1号墳は全長35mの前方後方墳で、やや細長い竪穴式石室を内蔵している。出土した副葬品としては古式様相をそなえた各種の須恵器、滑石製異形子持勾玉、同管玉、同棗玉、同小玉、めのう勾玉、ガラス玉、仿製内行花文鏡、金環、直刀などが検出されている。これらの古墳は5世紀後半から6世紀前半という比較的短期間のうちに集中的に営まれた方系墳のみによる古墳群として、この種の古墳群の成立過程を解明する上で注目されるとともに、この地に有力な地域勢力の存在があったことをうかがわせる。またその金崎古墳群らと本遺跡をはさんで相對峙する東側丘陵には馬込山古墳群、貝崎古墳群など多数の方系墳が知られている。後期に入ると、出雲地方の特徴のひとつとされる石棺式石室を内蔵する古墳も多く分布しており、その著例として東持田町の佐々木亮宅畑中古墳、野津真宅前古墳、加佐奈子神社古墳、加美古墳、上東川津町の西宗寺古墳、葉佐馬古墳などがある。これらは本遺跡の北側の丘陵に位置するものが多い。

西川津遺跡は大略以上のような歴史的環境を持つ、川津、持田平野の一角に営まれており、上記した数々の古墳群を形成する以前の生活の舞台となっていたことが推定されるところである。また、この遺跡は朝酌川の河川改修工事に伴い、昭和55年7月から本遺跡の南端に位置している宮尾坪内地区の発掘調査が行なわれたが、この結果によると、地表面下約1.8~2.9mの砂礫層から多量の土器（縄文時代~古墳時代前期）、石器、木製品などの出土があり注目をあつめているところである。



第2図 周辺 の 遺 跡 (1 : 25000)

- | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 西川津遺跡 | 2. タテチョウ遺跡 | 3. 島根大学構内遺跡 | 4. 橋本遺跡 |
| 5. 貝崎遺跡 | 6. 納佐遺跡 | 7. 薬師山古墳 | 8. 菅田丘古墳 |
| 9. 小丸山古墳 | 10. 宮田古墳群 | 11. 浜弓古墳 | 12. 上浜弓古墳 |
| 13. 金崎古墳群 | 14. 宮垣古墳群 | 15. 太源古墳 | 16. 佐々木浅市宅古墳 |
| 17. 野津真宅古墳 | 18. 加美古墳 | 19. 加奈子古墳 | 20. 貝崎古墳群 |
| 21. 古屋敷古墳 | 22. 空山古墳群 | 23. 馬込山古墳群 | |

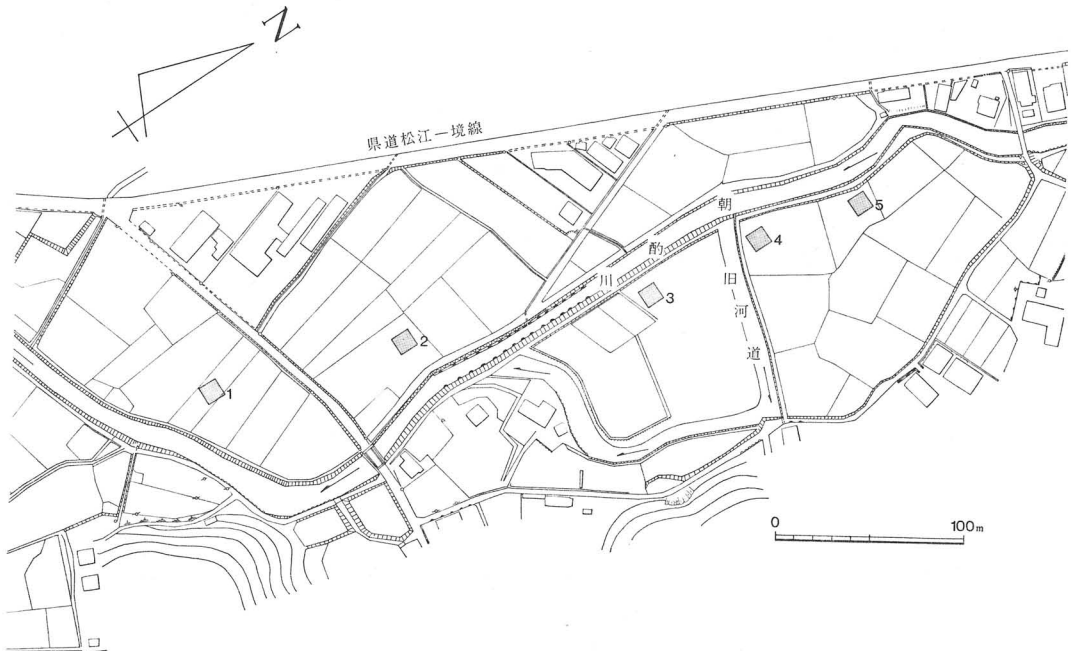
3. 発掘調査の概要

今回の発掘調査の対象としたのは、従来西川津遺跡と考えられていた範囲の北側部分を選定した。それは前述したようにこの遺跡の南側の地区は調査が行なわれており、ある程度の内容が判明しているという理由にもよる。調査は南北方向に長く広がっていると見られる遺跡のほぼ中央部に五ヶ所の調査坑を設けた。地籍では、西川津町字荒楨 670—1、同橋向647—1、同井手下639—1、同海崎599—3、同海崎601の五地区で、調査面積は約125 m^2 である。対象地区全面に磁北を基準として5mの方眼を組み、それに従って5×5mのグリッドを設定し、それを下流より順に第1～第5調査区と呼んだ。すなわち川の下流側右岸に二ヶ所、上流側左岸に三ヶ所設定され、それぞれの調査区の間隔は不統一だがほぼ70～80mを測る。



第3図 発掘風景

調査は測量から埋め戻しまでを、昭和56年1月13日から2月10日までの期間で実施した。冬期のしかも厳寒期にあたり、積雪と湧水に悩まされた発掘であったが、参加者の協力によりほぼ予定通



第4図 調査坑配置図 ■ 調査区

りに作業を終えることができた。各調査区の発掘は平均180cmの深さまで掘り下げ、第2調査区に限っては土層観察のため360cmの深さまで掘り下げた。

以下、各調査区毎にその概要を記すことにする。

(1) 第1調査区

右岸の最下流に設けたもので、現在地表は水田として耕作されており、地表面での標高は1.15mを測る。ここは、前述した発掘調査が行なわれた宮尾坪内地区から約150m北側の地点である。

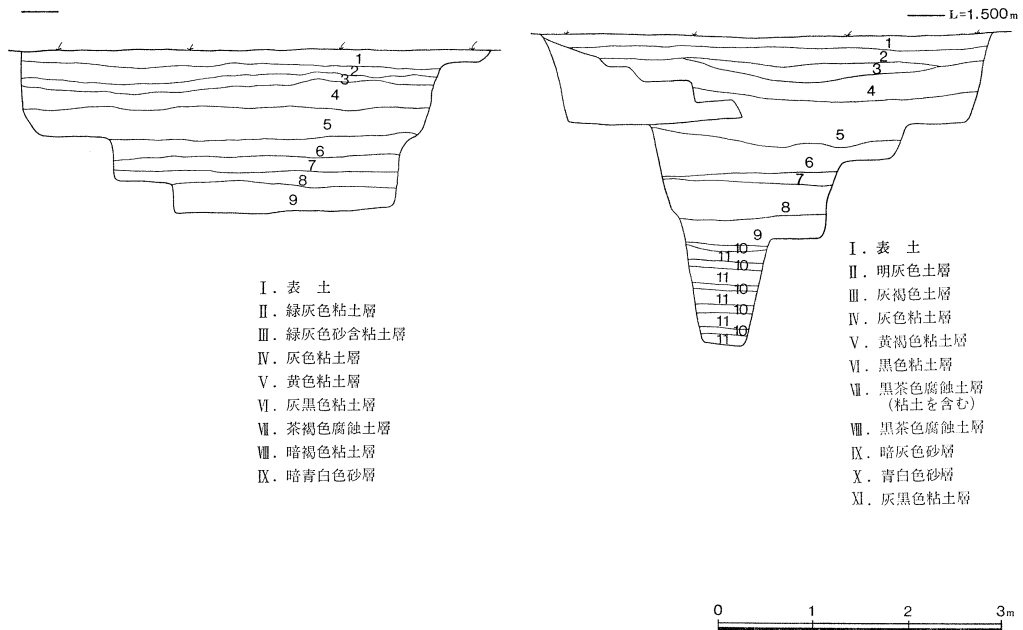
土層の堆積状況は西壁面で、表土・耕作土(15cm)、緑灰色粘土層(20cm)、緑灰色混砂土層(10cm)、灰色粘土層(20cm)、黄色粘土層(35cm)、灰黒色粘土層(20cm)、茶褐色腐蝕土層(20cm)、暗褐色粘土層(10cm)暗青白色砂層(35cm)となっている。これらの土層はほぼ水平に堆積しており、全体的に粘性を強く感じさせる層が多かった。茶褐色腐蝕土層では全体にわたって植物遺体が混入していた。

遺構は検出できなかったが、遺物は表土より陶磁器片1点、茶褐色腐蝕土層より縄文式土器片1点が出土している。

(2) 第2調査区

第1調査区より北へ80mほど進んだ地点で地表面は標高1.40mを測る。ここでは土層の堆積状況をつかむために地表下3.6mの深さまで掘り下げた。

土層の堆積は、基本的には、表土～粘土層～腐蝕土層～砂層～粘土と砂の交互層というもので、



第5図 第1調査区西壁、第2調査区北壁土層図

第1調査区の層序と似た状況を示している。

ここでは、表土から陶磁器片2点、灰色粘土層から須恵器片2点、土錘1点、青白色砂層から縄文式土器1点がそれぞれ検出されている。遺構は検出されなかったが、青灰色粘土層から検出した須恵器と土錘はほぼ同じ深さからの出土であり、注意される。

また、ここより西へ50mほどの地点で行なわれたボーリング調査の結果を知ることができたが、それによると地表下約10mの深さまで黒色粘土が堆積しており、この結果から推しても、この調査坑の掘り下げ面以下での遺構、遺物包含層の存在する可能性は少ないものと思える。

(3) 第3調査区

ここより朝酌川の左岸側に設けた。ここは現在休耕田となっており地表面で標高1.60mを測っている。土層は西壁面で、表土(20cm)、灰色微砂層(10cm)、灰褐色微砂層(20cm)、明灰色粘土層(15cm)、黄色粘土層(20cm)、灰黒色粘土層(60cm)、黒褐色粘土層(25cm)という堆積状況を示しており、第1調査区と同様に粘性の強い土層が多くみられ、灰黒色粘土層には植物遺体が多く混入していた。

出土遺物は灰褐色微砂層から瓦片が1点検出されたのみである。

(4) 第4調査区

第3調査区より北へ50mの地点に設定した。ここは朝酌川の旧河道が東に大きく蛇行する屈曲点の内側にあたり、東に20mで新河道、南へ5mで旧河道となる地点である。現在は水田で地表面で標高1.9mを測る。

土層の堆積状況は第1～第3調査区の場合と異なり、植物遺体を含む黒っぽい粘土層はみられなかった。西壁面でみる堆積状況は、表土(15cm)、灰色土層(10cm)暗茶色土層(5cm)、暗茶色微砂含土層(5cm)、明茶色土層(30cm)、灰褐色粘土層(70cm)、青灰色粘土層(40cm)というものであった。

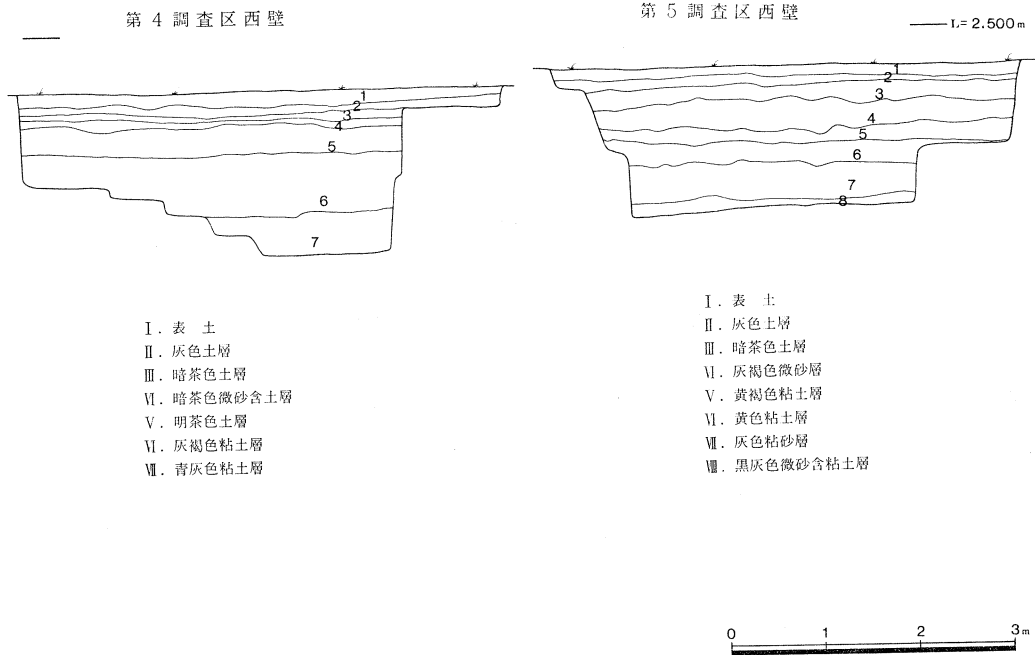
ここでは後述するが、近世の舟小屋と思える木組みの遺構が検出され、その遺構とともにカワラ片、陶磁器片、鉄釘、キセルなどの遺物が検出された。

(5) 第5調査区

第4調査区より北へ60mのところに設けた。今回の調査では1番北側にあたる調査坑である。この地点より朝酌川を挟んで西へ50mほどのところには西川津遺跡発見のきっかけとなった場所がある。現在水田として耕作されており、地表面で標高2.15mを測る。

土層の堆積状況は西壁面で、表土(15cm)、灰色土層(10cm)、暗灰色土層(10cm)、灰褐色微砂層(30cm)、黄褐色粘土層(30cm)、黄色粘土層(20cm)、灰色粘砂土層(20cm)、黒灰色微砂含粘土層(25cm)となっており、これより以下は、検索棒でのボーリング結果によると更にこれより下60cm(=地表下220cm)の深さのところから砂礫層の堆積となりこの層が遺物包含層となる可能性が強い。

ここからは、表土、灰色土層より陶磁器片各1点、黒灰色微砂含粘土層より弥生式土器片1点、黒耀石のチップ1点が出土している。



第 6 図 第 4 調査区西壁、第 5 調査区西壁土層図

4. 検出された遺構

木組み遺構（第 7 図）

第 4 調査区の表土下約 140cm ほど掘り下げた 青灰色粘土層（青色砂を若干含む）で検出された。わずかに 9m² 足らずの調査面積で、この遺構の全規模が検出されたものではなく部分的なものであるが、以下その概要を記すことにする。

調査坑中央部には、北北東方向に 1 列の 2 本の角材が配されている。それは松材を手斧状工具により粗削りし、15×12cm の断面方形をなし、1 本にそれぞれ 2 孔ずつのホゾ孔が上を向いてあけられており、同様に東側面もホゾ穴があいている。南側のもので全長 125cm を測り、北側のもはこれより長い。この角材から 30cm ほどの間隔をもち東側には、角材と平行する形で 2 本の丸太材が並ぶ。これは径 20cm ほどの松の自然木を 1/4 ほど削平し、その面を上に向ける。削られていない部分の周囲には樹皮が残っている。2 本は離れているが、端部には組み合わせのためと思える削り出しが施されており、もともとはつなぎ合わせて 1 本として使用されていたものと考えられる。そしてこれには直交して棧が組み合わされている。棧は全部で 5 本数えるが、北側の 2 本はしっかりと組み合わせられている。いずれも径 10cm 前後の丸木を粗く半載し、フラットな面が上を向き、両端部には嵌め込みのため削り出した突起をつけている。長さはほぼ 100cm を測る。また丸太材の内側にはこ

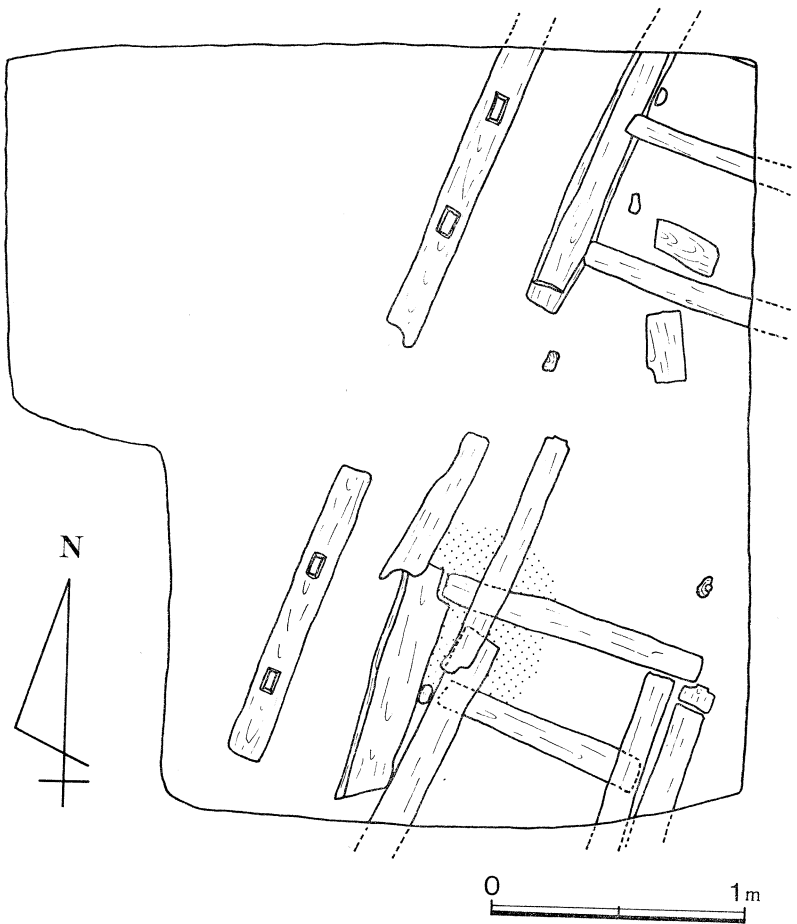
れに添うような形で木杭が打ち込まれており、これは丸太材を固定させるためのものと思われる。この西側の丸太材に対応するものは南東隅のところで2本の半載の材がみられる。つまりこの遺構の全体の形としては、はしご状の木組みを倒した形が想定される。

また、この遺構に伴って出土した遺物は、鉄釘（舟釘—5、角釘—46）、かすがい、煙管吸口、木片、瓦片、シユロタワシなどがあり、これらは1ヶ所（第7図ドットの部分）からかたまって出土し、この遺構の性格を決定づけるうえで貴重な資料といえる。

この遺構は、この調査区の南方5mのところにある朝酌川の旧河道に直面する形で構築されている。部分的な検出状況でこの遺構の性格を論ずるのは早計であるが、遺構が河に面する形で構築されていること、河に近い南側がやや低いこと、遺構に伴って出土した遺物の中に特殊な用途をもつ舟釘が認められるということから考えて、ここでは一応舟小屋状木組み遺構と呼ぶこととした。時期は伴出した陶磁器から17世紀以降のものとは比定される。

しかしながら、土地の所有者からこの調査区近くにはかつて水車小屋があった旨の話を開いたが、あるいはこの水車小屋に関する遺構の可能性もある。

いずれにしても、今後の発掘調査を待ち、遺構全体の形がはっきりと判明したうえで、この遺構の性格づけを考える必要があるだろう。



第7図 木組み遺構実測図

5. 出土した遺物

今回の調査によって得られた遺物は、多寡の差はあるが、いずれの調査区からも出土している。縄文式土器、弥生式土器、須恵器、陶磁器、瓦、鉄製品、木製品など多岐にわたっているが、鉄釘を除いていずれも量は少ない。以下、出土した遺物の種類ごとに略述することにする。

(1) 土器類 (第8図)

縄文式土器 (第8図1、2) 1.内外面に二枚貝条痕を施し、内面にナデがみられる。条痕は規則的ではないが割に鮮明である。器壁表面、および割口にわずかに細い繊維痕が認められる。焼成はもろい感じで、器厚は7mmを測る。ほぼ早期末の土器と比定できる。2.口縁端が細く、わずかに外反する形態を持つものである。外面条痕、内面ナデで、内面下部にわずかながら条痕がみられる。焼成は良好で、器厚7mmを測る。

弥生式土器、(第8図3) 甕の破片である。口縁部と底部が欠損するものである。外面は粗い刷毛目、胴部下半には炭化物が付着する。内面は胴上部以下へう削り、頸部下に若干の指頭圧痕を残す。頸部は内外面ともナデ調整。器厚は肩部で5mm、底部近くでは2mmほどしかない。胎土には若干の小砂粒を含みやや粗い感じを与える。色調は暗灰色を呈し、焼成は良い。

須恵器 (第8図5~8)、5. 坏の小破片である。内傾した立ち上がりを持ち、受部は外方にのびて終る。体部は弧状を描くものと思える。内外面とも回転ナデにより仕上げられる。6. 高台部分が欠損する坏である。ほぼ平坦な底部に直立ぎみの低い高台が付くものと思える。体部は直線的な立ち上りを示す。内外面とも回転ナデにより調整され、底部との境にはへう削りを残す。底部は回転糸切りである。7、8いずれも甕と思える小破片である。7は器厚1.3cmほどの厚手のもので、外面に格子状平行叩目、内面には同心円状叩目が入る。8は器表面、破面など摩耗が著しく、かなりの移動があったことをうかがわせるものである。外面は格子状平行叩目、内面ははっきりしないが、同心円状叩目がみられる。4.先端部が少々欠損するが、長楕円形を呈する土錘である。中央部には直径1cmの円形の孔が貫通する。長さ6.5cm、幅3.1cmを測り、表面はへう磨きにより調整されている。

(2) 陶磁器類 (第9図1~5)

1. 白磁青花染付の皿で、碁笥底を呈する。見込みには花と思える抽象図柄が描かれている。また、体部外面には芭蕉葉文が入る。文様はいずれも一筆により描かれており古式の様相をそなえている。焼成は不良で、磁土の磁器化があまりなく、陶質に近いやや黄ばんだ白色を呈する。また、釉のかかるところ全てに嵌入がみられる。底部には砂粒の遊離痕がみられる。ほぼ16世紀前半ぐらいのものと考えられる。2.外面は赤茶色、内面は緑茶色の釉がかかる。内外面の破面近くにわずかに青白色を呈する灰釉がみられる。3.青磁の香炉と思える小破片。4.鉢形の陶器で、器表面には暗緑褐色の釉がかかる。5.小破片であり、外面は黒茶色の釉があり、内面には格子目状の叩目がある。2、4、5はいずれも唐津系の陶器と思える。3、4、5は木組み遺構に伴って出土した。

(3) 金属器 (第9図、6~27)

いずれも第4グリッドの木組み遺構に伴って出土したものである。釘類が主で、なかでも角釘は46点を数える。その他には舟釘、カスガイ、煙管吸口などがある。

6. 鉄製のカスガイで、先端部の片方を欠失する。全体に錆化が進んでいる。全長18cm、幅2cm、厚さ0.5cmを測る。7. 鑿状をなす鉄製品で、全体に錆がまわり赤褐色を呈する。断面は1cmの正方形、先端部は8×4mmの長方形を呈している。

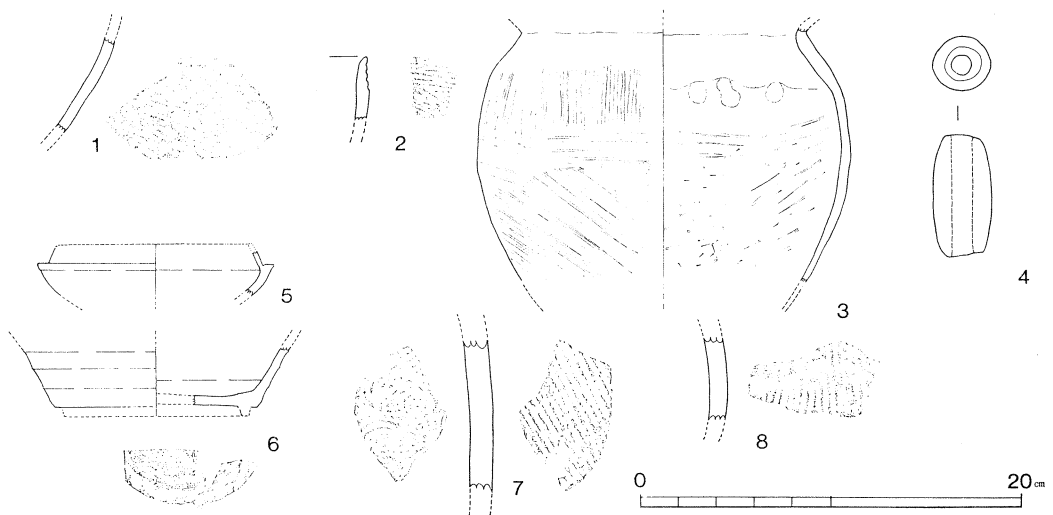
舟釘（9～11）、いずれも保存状況が良く、あまり錆化は進んでいない。9は先端部分に幅3cmの木質が付着しており、使用されていたことがうかがわれる。全長10cm、幅1cm、厚0.5cm。10もこれとほぼ同じ形状を示す。11は上部で大きく曲がっているが、それが製作時か使用時のものであるか不明である。端部には鑿状工具による切断痕が明瞭に残る。

角釘（12～16、18～25）、長さは5～8cmを測る。頭部の形状により使用のもの（12、19、20、24）、未使用のもの（18、21）が判別できる。使用のものは頭部がつぶれた形状をなす。いずれも鍛造品と思え、残存状態は良好である。断面は全て方形を呈する。

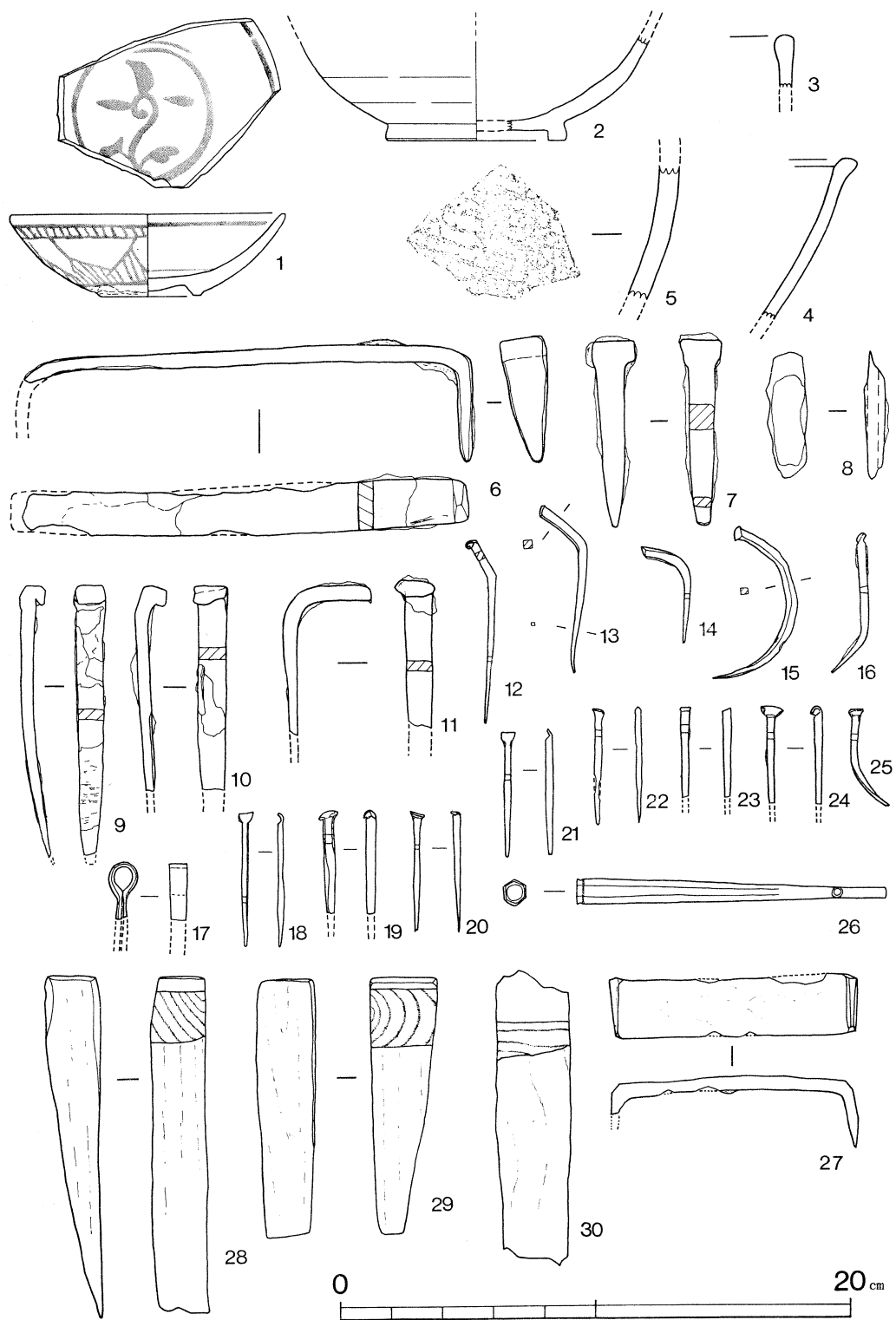
煙管（26）、全長12cm、径1cmで、断面六角形を呈する。吸口部は径0.4cmの円形断面を呈する。先方には3cmの長さで竹管が挿入されている。

8、17、27は用途不明の鉄製品で今後の類例品を待ち考察を行いたい。

(4) 木製品（28～30）、長さ12cm前後を測る楔形を呈するものである。28、29はカシ材の柾目、30は松材の板目をそれぞれ用いている。



第8図 遺物実測図(1)



第9图 遗物实测图 (2)

6. ま と め

以上、今回行なった西川津遺跡の詳細分布調査の概要について述べてきたが、以下に今回の調査で得られた成果、今後の問題など若干述べ、まとめとしたい。

調査は南北に約800m、東西に約200mの広がりをもってしていると推定されている本遺跡のほぼ中央部から以北に5ヶ所の調査坑を設け発掘調査を実施した。その結果、検出された遺物は各時代、各種にわたるものであった。しかしながらその量はいずれも少量であり、特に第1調査区では縄文式土器片1点、陶磁器片1点、第3調査区では瓦片1点という出土であった。これら2つの調査区は遺構の検出もなく、また堆積土層の観察から推しても遺構の存在する可能性は少ないものと思える。しかし、第2調査区では、出土遺物の数は少なかったものの、青灰色粘土層から須恵器2点、土錘1点がほぼ同じ深さから出土しており、この層に奈良時代以降の遺構が存在する可能性もうかがえる。

第4調査区では前述したような木組みの遺構が検出された。この遺構に伴って出土した遺物から近世以降のものと推定される。全体の形状は明らかでないが、現時点では朝酌川に関係する何らかの遺構と思われる。伴って出土した遺物には陶磁器類、瓦、鉄釘、木片などがあり、遺構の性格を決定づけるうえで重要な決め手となるものである。このような木組みの遺構が報告された例は、県下はもとより全国的にみてもあまり類例がなく、今後の発掘調査を待ち、全体的な形状が明らかになったうえで再検討を要するものである。

第5調査区では弥生式土器の出土があった。ここは諸般の制約から地表下150cm以下の掘り下げは行っていないが、西川津遺跡発見のきっかけとなった場所に近く、また付近には海崎遺跡、貝崎古墳群なども存在するところから、十分に遺構、遺物包含層の存在することが予想される場所である。

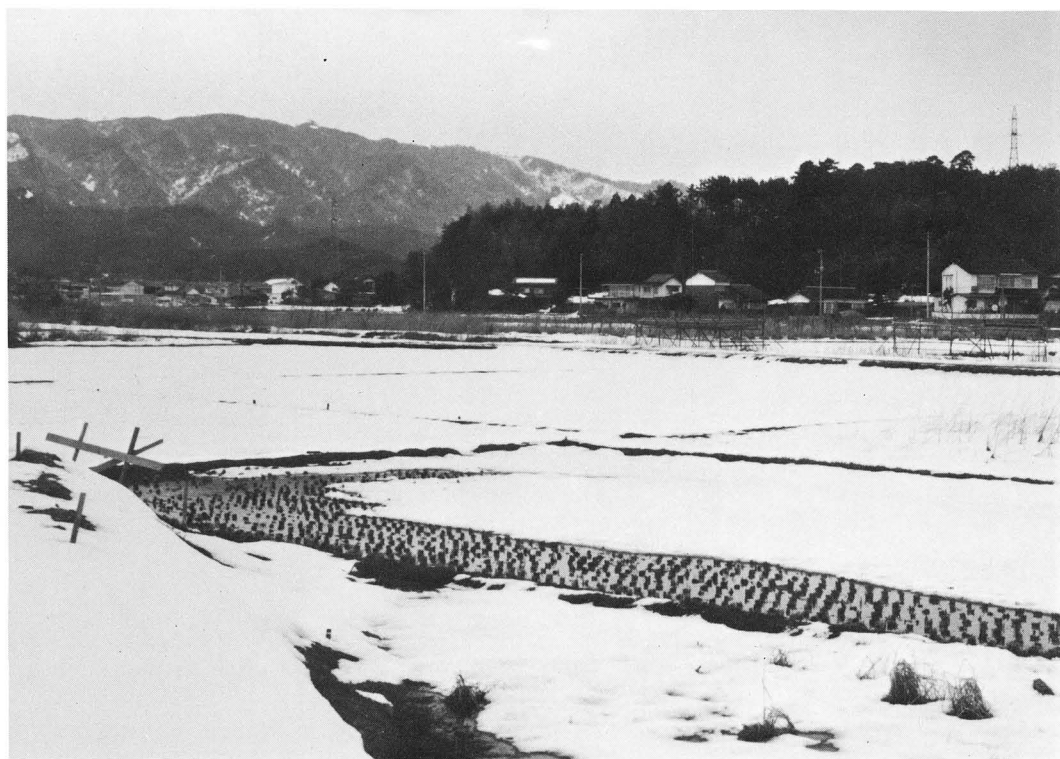
遺物のなかで注目されるのは、舟小屋状木組の遺構に伴って出土した鉄釘があげられる。これはいっしょに検出された陶磁器類から推して江戸時代以降のものと推定されるが、残存状態が良好で、その製作方法、使用法など当時の技術を知るうえで興味深い資料といえよう。

今回の調査は遺跡の範囲、実態を明らかにするというのを念頭に置き実施した。従来西川津遺跡と呼ばれている本遺跡の範囲はかなりの広がりを持っていると思われていた。しかし、狭い調査面積ではあったが、今回の調査結果から本遺跡は、第5調査区と遺跡発見地点を含む北側周辺と、昭和55年7月からの調査により弥生式土器、木製品が多量に出土した学園橋周辺の南側の2つの地区に分けられることが判明した。そしてこれらの地区をそれぞれの字名から、北側を海崎地区、南側を宮尾坪内地区とし、今後その名称を用いることにしたい。

わずか125㎡に足らずの今回の調査のみでは本遺跡の性格を語るには十分でない。しかし遺構の存在することは確実であり、西川津遺跡の拡がりの中にとらえられうるので、事業との調整の際には十分留意する必要がある。



1. 遺跡の航空写真



1. 遺跡遠景（南より）



2. 遺跡遠景（北より）



1. 発掘作業風景



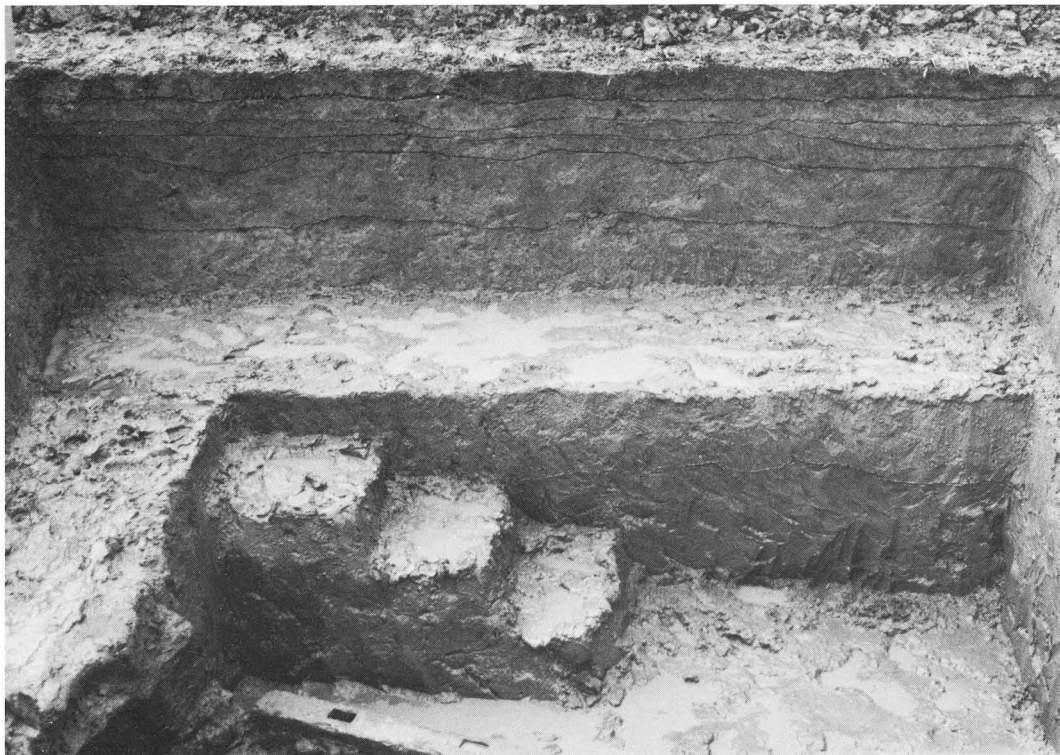
2. 第1グリッド西壁



1. 第 2 グリッド北壁



2. 第 3 グリッド西壁



1. 第4グリッド西壁



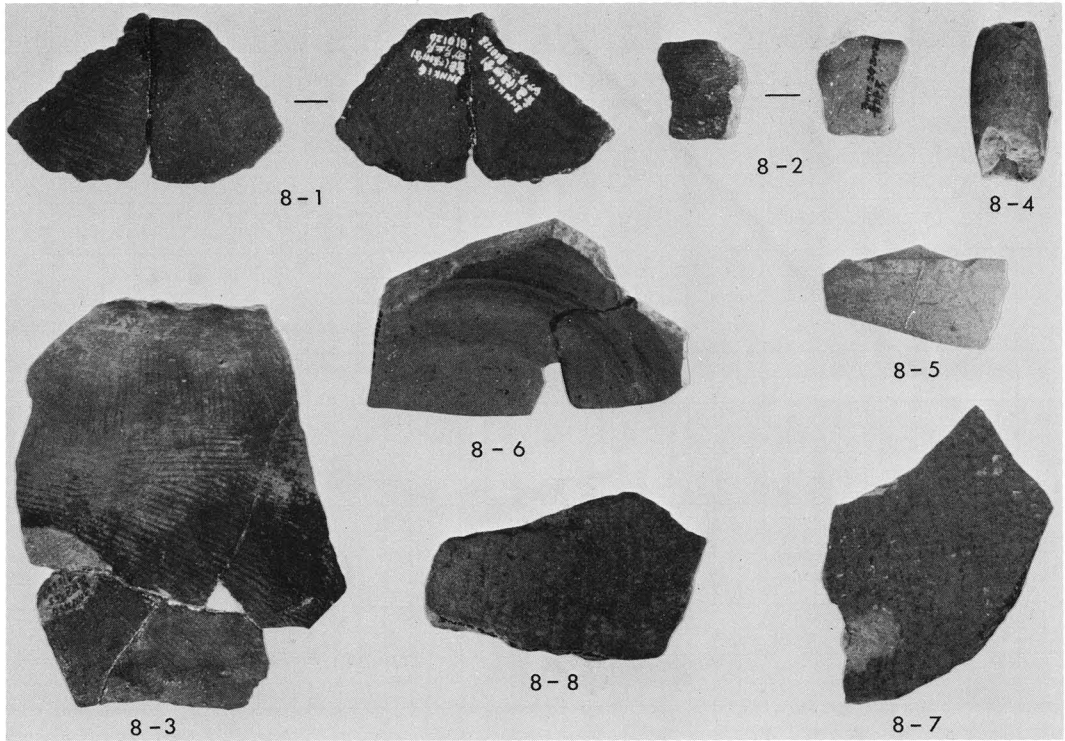
2. 第5グリッド西壁



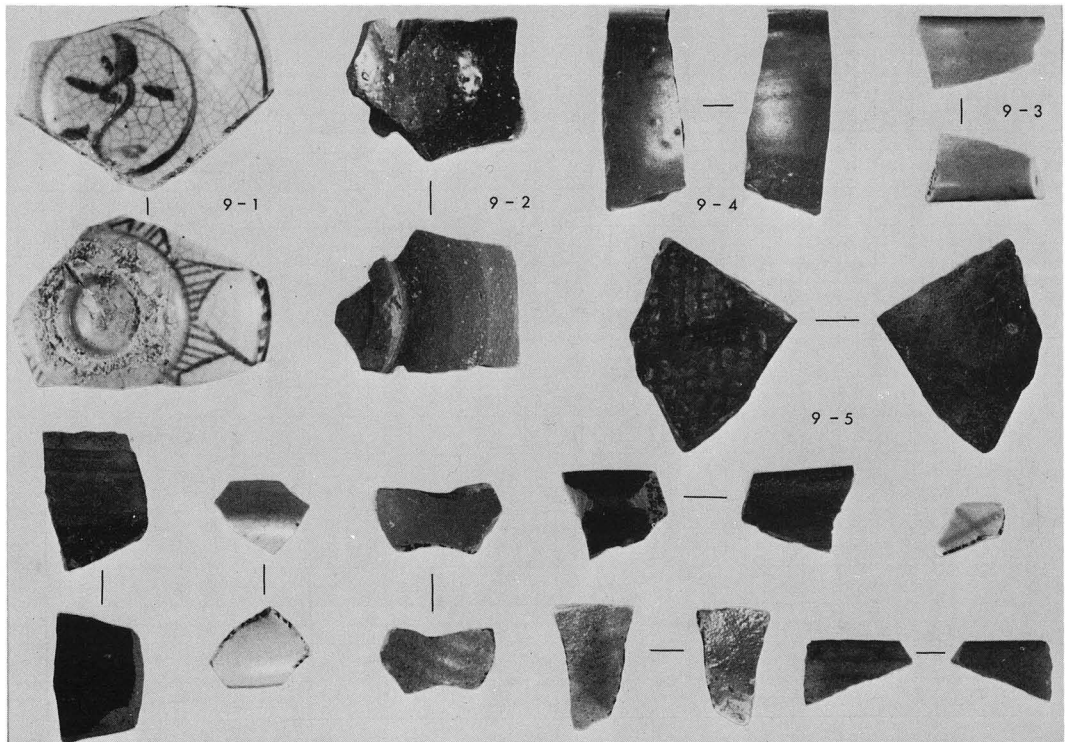
1. 木組み遺構（西より）



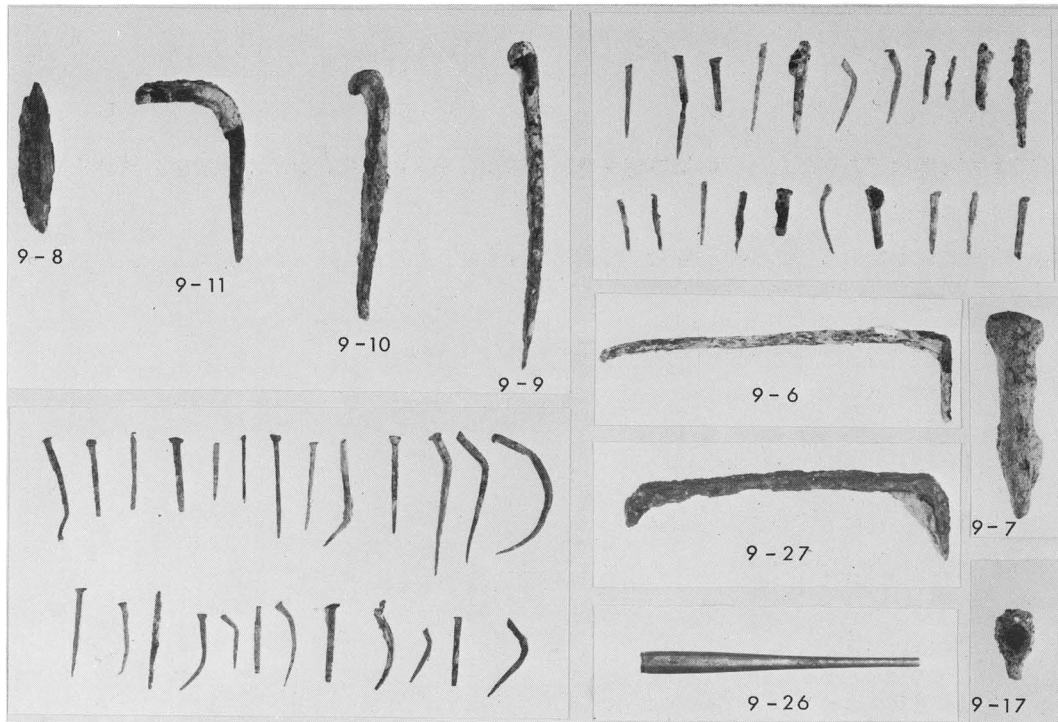
2. 木組み遺構（北より）



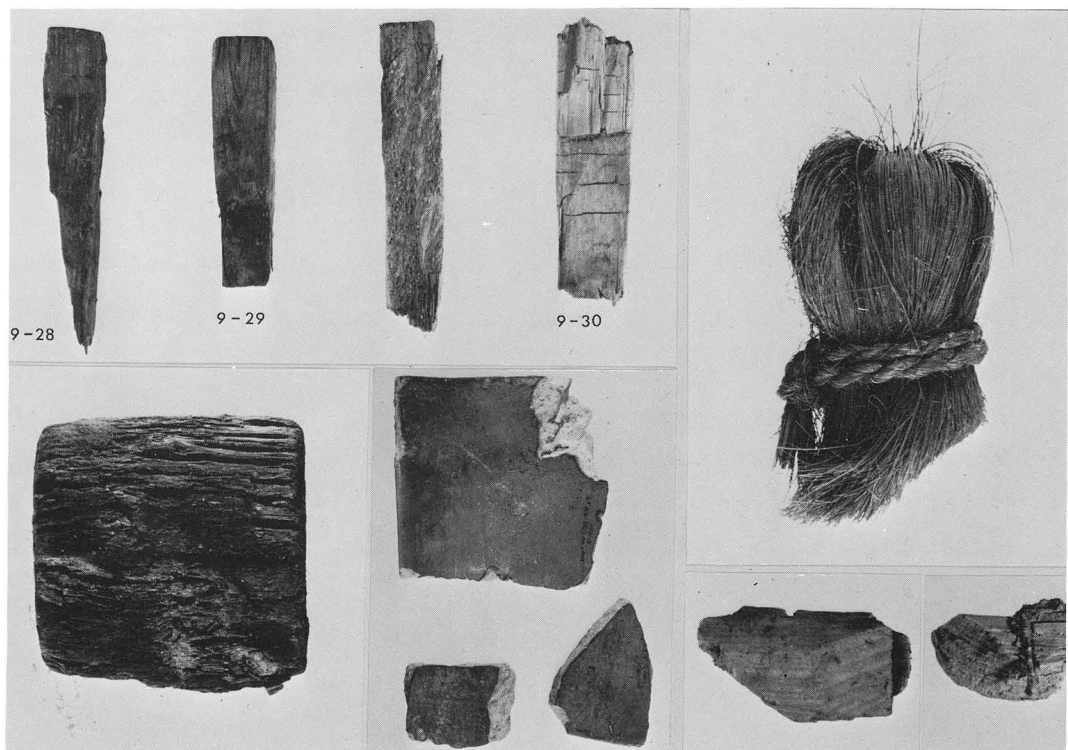
1. 縄文式土器、弥生式土器、須恵器、土錘



2. 陶磁器



1. 金属製品



2. その他の遺物